

担当箇所

NISBETT, R.E., CAPUTO, C., LEGANT, P., MARECEK, J. (1973). Is She really going out with him?
p.37, 1 行目から p.37, 31 行目まで

はじめに

自分自身や他者の行動について考察することが、普段の会話の中心である。そして行動について話すとき、私たちはその状況をただ描写するのではなく、理由を説明しようとする。「彼は中年期の危機に瀕しているのだあのバイクを買った」とか、「彼が金持ちだから彼女は彼が好きなのだ」と私たちは言うであろう。興味深いことに私たちは、他者の行動を説明するのは異なる方法で自分自身の行動を説明する傾向がある。

Nisbett ら（1973）は、行為者（行動をする人々）と観察者（それを見る人々）が行動を説明する際に用いる解釈の相違を実証することに着手した。彼らは、私たちが自分自身の行動を説明するとき、他者の行動を説明するときとは異なる帰属（attribution）を示唆した。Nisbett らは、私たちは自分自身の行動を、自分自身よりも自分が置かれている状況に原因があるとみなす傾向があることを主張した（行為者の視点）。逆に他者の行動は、その人が置かれている状況よりもその人自身に原因があるとみなす（観察者の視点）。

例を挙げればこの議論が明確になるだろう。ある人が試験に落ちたとしよう。その人自身は（Nisbett らによると）、試験の難しさや試験会場の居心地の悪さ、または近所の人が試験前日の夜から大音量で音楽を流していたことなどを失敗の原因として説明する傾向がある。これらはすべて状況的要因である。その一方で観察者は、たとえばその人が試験に合格する程賢くないとか、試験の準備が十分にできていなかったとか、怠けているとか、失敗はその人自身に起因するとして疑う可能性が高い。これらは属性的要因である。

本論文で Nisbett らが報告している 3 つの研究は、以下に要約されている。

●用語

中年期の危機(mid-life crisis)

下山（2014）によると、「人生経路を折り返す中年期に至って、過去に達成した実績や将来に達成する可能性を、かつて抱いていた人生設計上の目標に照らし合わせた結果、自身の限界に直面し虚無感や抑うつ感が生じることを、中年期の危機と呼ぶ。」と説明されている。

帰属理論(attribution theory)

人々が自分自身、そして他人の行動の原因をどのようにして理解しているか考察する社会心理学の理論。

Vandenbos (2007 繁耕・四本訳 2013) によると、「自分自身や他者の行動する動機を帰属する過程についての研究。動機は、内的で属性帰属あるいは状況帰属に帰属されると考えられる。」と説明されている。

削除: 説明

書式を変更: フォントの色 : 赤

属性帰属(dispositional attribution)

特定の行動の原因が、環境の要求からではなく、その人自身の性格または特性から生じていると考えられる場合のこと。

Vandenbos (2007 繁枘・四本訳 2013) によると、「帰属理論における、自分自身や他の人の行動をパーソナリティや心的状態、態度といった内的要因や心理的要因に帰属すること。」と説明されている。

状況帰属(situational attribution)

Vandenbos (2007 繁枘・四本訳 2013) によると、「帰属理論において、自他の行動を、他者からの圧力のような外的、状況的要因に帰属すること。」と説明されている。

●文献

下山 晴彦（編）(2014). 誠信 心理学辞典 [新版] , p.220. 誠信書房

Gary R. Vandenbos, Ph.D. (2007). APA Dictionary of Psychology. The American Psychological Association (APA).

（G. R. ファンデンボス 繁枘算男・四本裕子（監訳）（2013）. （APA 心理学大辞典）p.171, 543, 414. 培風館）

加瀬由佳（2 班；6 人中 2 番目）

担当箇所

NISBETT, R.E., CAPUTO, C., LEGANT, P., MARECEK, J. (1973). Is she really going out with him?
p.37 「The first study」から p.38, 18 行目まで

研究 1

実験参加者

データは Yale 大学の 28 組の女子学生から報告された。彼女たちは参加に 1.50 ドル支払われた人もいれば、心理学入門コースの単位を受け取った人もいた。

デザイン

この実験は 2 つの独立変数 (a 2×2 の要因計画) を用いた独立測定デザインが使用された。1 つ目の独立変数は参加者を “行為者” 条件か “観察者” 条件のどちらか一方に無作為に割り当てることによって操作された。次に行為者たちはある特定のタスクを “自発的に” 引き受けるか、“自発的に引き受けない” かのどちらか一方を選択し、2 つ目の独立変数の 2 つの値を与えられた。

手順と根拠

参加者は対にさせられ、各ペアでは 1 人の参加者は “行為者” 条件に、もう一方は “観察者” 条件に割り当てられた。その割り当ては無作為に行われた。行為者条件の参加者は実験者たちのうちの 1 人が自身のペアである観察者と、2 人の実験者の協力者（その協力者の役割はここでは私たちが気にする必要はない）と一緒に座っている部屋に連れていかれた。行為者は話をされ、“恵まれていない人たちが少数派のグループの学習” に関わる Yale 大学で財務業務をしている重要な訪問客のグループをもてなすボランティア（時給と引き換えに）になるかどうか尋ねられた (p. 156)。その時観察者は同じ部屋にいたので、彼らは行為者がどんな決断をしたかを見た。その行為者の決断は記録された。

その行為者らは続いて、ある類似した種類のタスク（すなわち “統一基金” への勧誘を手伝う）を遂行するボランティアになる可能性がどのくらいあるかを、9 段階の Likert 尺度で推定することを求められた。

●用語

独立測定 (independent measures) また参加者間、異なる参加者

異なる参加者グループがその実験のそれぞれの条件を実行する実験デザイン

また、参加者間計画は、「一人ひとりもしくは他の抽出単位が、1 つの実験条件（処遇）のみを経験するため、単独の最終得点が分析に投入されるような多くの実験計画のこと。」(G.R フェンデンボス、2013、p.740)

要因計画 (factorial design)

複数の独立変数を含んでいる実験デザインの 1 種。

書式を変更：蛍光ペン

書式を変更：蛍光ペン

削除：つむぎ

削除：についての決断をするかどうか

削除：要員

2 × 2 の要因計画 (2 × 2 factorial design)

「2つの独立変数それぞれが2つの水準をもつ実験計画。この計画を行列として表すと、2つの行は独立変数の1つを表し、2つの列は別の独立変数を表す。」(G.R ファンデンボス、2013、p.740)

削除: 要員

独立変数 (independent variable)

実験において効果を引き起こすために実験者が設定する条件。これらは体系的に変化するため、実験者は結果の変化についての結論を出すことができる。

従属変数

「独立変数の生起あるいは変動の後で変化が生じることが観察される「結果」変数。」(G.R ファンデンボス、2013、p.740)

リッカート尺度 (Likert scale)

「態度対象に対する強い肯定と否定の評価を反映するような文章で構成される直接的態度測定のこと。回答は、「強く同意する」から「強く同意しない」までの反応段階評定におけるそれぞれの主張に対する反応を指し示す。」(G.R ファンデンボス、2013、p.915)

直接的態度測定

自分の態度を報告するように求める、態度を測定するための手続きのこと。(G.R ファンデンボス、2013、p.609)

●文献

G.R. ファンデンボス (原著監修) 繁耕算男、四本裕子 (監訳) (2013). 「APA 心理学大辞典」培風館

川縁美空（2 班；6 人中 3 番目）

担当箇所

Nissbett, R.E., Caputo, C., Legant, P., Marecek, J. (1973). Is she really going out with him?
p. 37, 18 行目から p. 38, 6 行目まで

夫々の観察者たちは大学への融資を頼むための 2 つセットのボランティアに参加した行為者の、貢献しやすさを推定した。リッカート尺度が用いられ、8 点はとても貢献する傾向が高いことを示し、0 点は全く貢献する傾向がないことを示した。

仮説では、観察者と行為者の変数と、行為者が元の活動に本当にボランティアとして参加したかどうかの変数の間に交互作用があるだろうとされた。Nisbett らは特に、観察者の推測が行為者の推測よりも行為者の実際の選択による影響を受けるであろうと予測した。これは、観察者が行為者の最初の決定を、安定した特性や属性に由来するものだとみる傾向にあるからだ。このは、同じ人物に今後も同じような決定をさせるだろうとされるものだ（例えば彼は人助けするタイプの人といったものがある）。その一方で、行為者は自分たちの決定をそのときの状況にあるいくつかの特徴によるものとするだろう（例えばこれは立派で価値の高い目的であるといったものがある）。したがって、行為者たちがどの程度件の基金に貢献しやすいかどうかの彼ら自身の予測は、彼らがももとの作業にボランティアとして参加したかどうかにあまり影響を受けまいだろうとされた。

結果

表 2.2 は行為者自身がどのくらい件の基金に貢献しやすいかどうかを予測したものを表している。そしてこの予測は、彼らが実際に初めの作業にボランティア参加したかどうかの影響を比較的受けていないものであった。実際のところ、初めの作業にボランティア参加しなかった人は、件の基金にボランティア参加する傾向が少しだけ強いと自身を位置づけていた。反対に、観察者の予測ではより行為者の実際の行動の影響が色濃く現れているように見られた。元の作業にボランティアとして参加した人々は、もう一度ボランティアをする傾向がより高いと見なされた。（これは p 値（有意確率）が 0.05 未満であり、統計的に有意であると報告された。）その交互作用は、統計的に有意に近い効果が見られた（ $p < .07$ ）差についての報告をした。

表 2.2 行為者と観察者による、重要な来訪者をもてなしたかどうかによって、行為者が似たような業務にボランティアとしてどの程度貢献しやすいかの推定値

コメントの追加 [MN1]: interaction

削除: 相互作用

削除: 本来の

削除: 一定の特徴や傾向

削除: 一定の特徴や傾向

削除:。

削除:。

削除:。

削除: ケース

削除:。

削除: 融資

削除: 融資

削除:

削除: 融資

削除: 相互

削除: 有意水準を 0.07 として

書式を変更: フォント: 斜体

コメントの追加 [MN2]: actor : 行為者 図中

削除: その活動の目的が

削除: すためかどうか

査定人	参加者の行動	
	貢献した	貢献しなかった
参加者	3.31	3.92
n(実数)	16	12
観察者	4.27	2.78
n	15	28

出典：Nisbett 他(1973)から引用

●用語

有意/有意差(significant difference)

子安他(2021)によると、統計的仮説検定において*帰無仮説'を棄却したとき、例えば*有意水準'が $\alpha = 0.05$ であれば、「5 % 水準で有意である」という。群間の*平均'の差など、値の「差」を扱う検定においては、「有意差がある」ということもある。これは、*標本'(データ)に見られる*相関'や群間差などの効果は、*母集団'で効果が全くないときに単なる標本誤差によって生じうるものか否かという「統計的な」意味を述べたもので、実質的に意味のある効果か否かとは別のである。

有意水準(significant level)

子安他(2021)によると、統計的仮説検定では、*帰無仮説'のもとではまれにしか得られない(通常は得られにくい)結果が得られたときに帰無仮説を棄却するか、どのくらい小さい*確率'であれば「まれにしか得られない」とみなしてよいかという基準を分析者が定めたものを有意水準といい、一般に記号 α で表す。有意水準の値として、慣習的で5 % もしくは1 % とするのが一般的である。

→有意確率(significant probability)

子安他によると、統計的仮説検定において、*標本'のデータから算出した検定*統計量'の実現値について、それよりも極端な(効果の大きい)値が*帰無仮説'のもとで得られる*確率'で、p 値ともよばれる。対立仮説(*両側検定'か*片側検定'か)に応じて、実現値に対する両側確率、上側確率、下側確率のどれを用いるかが異なり、一般に、有意確率が*有意水準' α 未満なら帰無仮説を棄却する。

帰無仮説(null hypothesis)

子安他によると、統計的仮説検定で設定する2つの仮説のうち、「*母集団'において群間の*平均'の差が0である」「母集団における*相関係数'が0である」など、効果がないことを主張する(多くの場合分析者にとって否定したい)仮説を帰無仮説とよび、 H_0 という記号で表す。

情報をまとめると

p 値(有意確率)；収集したデータから算出される値 α：有意水準 $p < \alpha \Rightarrow$ 帰無仮説が棄却される $p > \alpha \Rightarrow$ 帰無仮説が棄却されない

●文献

子安増生, 丹野義彦, 箱田裕司 (監修) (2021). 有斐閣 現代心理学辞典, p. 149~150, 761
有斐閣

担当箇所

NISBETT, RE., CAPUTO, C., LEGANT, P., MARECEK, J. (1973).

Is she really going out with him?

p.39, 14 行目 The second study から

p.40, 15 行目 Source: Adapted from Nisbett et al.(1973).まで

研究 2

研究参加者

イエール大学からの男子学生が研究 2 と 3 の参加者となった。研究 2 では、これらの参加者のうち 23 人からデータが集められ、研究 3 では 24 人の参加者からデータが集められた。彼らには参加費として 1.50 ドルが支払われた。

研究デザイン

研究 2 では、2 条件反復測定計画を採用した。1 つの条件では、参加者は彼ら自身の行動について書くことを求められ、もうひとつの条件では、彼らは彼らの親友の行動について書くことを求められた。

削除: つの

手続きと合理化

参加者は、次の各議題に対して 1 つずつ、4 つの短い文章を書くように求められた。
: なぜ彼らは「過去 1 年間で最も頻繁にデートをした女の子」を好きになったのか。(p.158)
: 彼らは、なぜ大学で学んでいることを選んだのか。
: なぜ彼らの親友は過去 1 年間で最も頻繁にデートをした女の子を好きになったのか。
: 彼らの親友は、なぜその大学のコースを選んだのか。

削除: 手順

削除: 根拠

その文章は、実験者のひとりによってコード化され、そしてそれぞれがどれほど「属性」と「状況」的な理由を含んでいるかによって採点された。状況的な理由は、彼女と大学のコースの特徴に焦点を当てたものであった。属性な理由は、彼らが説明しようとしている行動をした人（彼ら自身、または彼らの親友のどちらか一方）に焦点を当てたものであった。実験仮説の知識がない、独立したコーダーもまた、その文章をコード化した。その実験者の符号化は結果を報告する中で使用されたが、著者は、「ほとんど同じ(p.158)」結果が独立したコーダーのバージョンのデータから現れたと主張した。

削除: 番号を振られ

削除: 気質

削除: 気質的

削除: に番号を振った

参加者が彼らの選択について書いたその文章は、実際には、行為者の記述である一方で、著者は、参加者は自身の行動について説明するには状況帰属をより多く使用し、彼らの親友の行動について説明する際は属性帰属をより多く使用するだろうと考えていた。

コメントの追加 [MN3]: 誤訳

削除: 参加者の行動の

削除: 観察者の見方、考え方によって書かれた親友についての文章でもあったのだ。...

結果

表 2,3 は、参加者自身が彼らの彼女を好きな理由について書かれた文章が、属性的な理由と比較して、状況的な理由が 2 倍以上多く含まれていることを示している(p<. 02 のレベルで有意)。

削除: 気質的な

表 2.3 参加者が彼ら自身と、彼らの親友の、彼女の選択の説明として与えた **実体** (状況的な) 理由の数と **属性的**理由の数

説明	彼女のことを好きな理由	
	実体 (状況的な)	属性的 な
自身の行動	4. 61	2. 04
親友の行動	2. 70	2. 57

典拠：Nisbett et al. (1973)から適応

削除: 実在の

削除: 気質的な

削除: 実在の

削除: 気質

●用語

被験体(subject)

G.R.ファンデンボス(2013)によると、「実験や研究に参加する個々のヒトあるいはヒト以外の動物で、その反応やパフォーマンスが報告あるいは評価される。ヒトに関しては、現在、参加者という言葉が概して好まれるが、これは被験体という言葉が非人間的で、実験を受ける人の受動性や従属性を暗に意味するからである。」と説明されている。

反復測定計画(repeated measures design)

それぞれの参加者が、それぞれの実験の条件を実行するような実験計画。

また、G.R.ファンデンボス(2013)によると、「同一の個人に関して同一の従属変数を複数回測定する研究計画のこと。」と説明されている。

状況帰属(situational attribution)

G.R.ファンデンボス(2013)によると、「1. 帰属理論において、自他の行動を、他者からの圧力のような外的・状況的な原因に帰属すること。2. 運、他者、状況のような、その人が関連していない原因に出来事や結果を帰属すること。」と説明されている。

属性帰属(dispositional attribution)

G.R.ファンデンボス(2013)によると、「1. 帰属理論における、自分自身や他の人の行動をパーソナリティや心的状態、態度といった内的要因や心理的要因に帰属すること。2. 出来事や成果がその人自身に特有の内的要因、または心理的要因に起因したものと帰属すること。その例として、決断や判断、能力、努力がある。」と説明されている。

●文献

G.R.ファンデンボス (原著監修) (2013). APA 心理学大辞典 , p740. , p.734, p.414, p.543 培風館

担当箇所

NISBETT, R.E., CAPUTO, C. LEGANT, P., MARECEK, J. (1973) Is she really going out with him?
p.40, 8 行目から p.41, 6 行目まで

研究 3

実験参加者

実験参加者は研究 2 に記載されたとおりである。

研究デザイン

研究 3 は、実験参加者が自分自身、親友、父親、知人、有名なテレビのコメンテーターについて述べるために、どの特徴形容詞を使うかを決めるという質問紙に基づくものであった。

手続きと合理化

実験参加者は、自分自身、親友、父親、知人、当時の有名なテレビ・コメンテーター（Walter Cronkite）の 5 人について、それぞれ 1 つずつ、計 5 つの質問紙に回答した。どのアンケートも同じ 20 項目で構成されている。項目は、特性用語（たとえば「大胆」、その反対語（「慎重」、または「状況による」というフレーズで構成されていた。実験参加者は「刺激人物」について最も適切な記述を選ばなければならなかった。実験参加者が質問紙に回答する順番はカウンターバランスとした、言い換えれば、実験参加者が各刺激人物について考える順番は、参加者によって系統的に変えられた。

もし行為者と観察者の違いに関する Nisbett らの主張が正しければ、その時は実験参加者が自分自身を含むことについて回答した質問紙には、平均して他の質問紙よりも「状況による」という回答が多く含まれると予想される。彼らの考え方は、私たちが自分自身を表現するために利用できる特性用語は、他人を表現するために利用できる特性用語よりも少ないということを暗示している、というのも、私たちは自分自身の行動を説明するとき、自分自身の特徴よりも、自分が置かれている状況の特徴に焦点を当てる傾向があるからである。

結果

表 2-4 は、平均して、他のすべての刺激人物よりも自己に帰する特性記述が少なかったことを示している。言い換えると、人々は他者に関する質問紙よりも自己に関する質問紙の方が、「状況による」をしばしば選択する。平均的な自己評価と他の 4 つの質問紙の評価との差は、すべて少なくとも $p < 0.05$ のレベルで有意であった。

表2.4 各刺激人物に当てはめられた特徴の平均数(20個中)

項目	自己	親友	父	知人	Cronkite
	11.92 ^a	14.21 ^{bc}	13.42 ^b	13.42 ^b	15.08 ^c

ノート：上付き文字を共有しない方法は 0.05 レベルかそれ以上で互いに異なる
出典：Nisbett 他(1973)

削除：手順

削除：根拠

削除：者

書式を変更：蛍光ペン

コメントの追加 [MN4]: 意味を質問する

担当箇所

Nisbett, R.E., Caputo, C., Legant, P., Marecek, J. (1973). Is she really going out with him?
p.41, Discussion から章末まで

考察

この3つの研究はすべて、行動を説明する際に、行為者と観察者の視点の違いに関する Nisbett らの主張を裏付けている。研究1の観察者は行為者のもとの決定を、将来も同じ種の決定をしそうな安定した属性に帰属しているようであった。研究2では、行動者は自分の彼女に対する好意を説明するために状況的理由を、観察者は友人の大学コースの選択を説明するために性質的理由をより多く使用する。研究3は、人が自己を説明するために利用できる特性(traits)語は、他人を説明するために利用できるよりも少ないことを示唆した。

人々が自己と他者に対して異なる暗黙の性格観を持つ傾向があることを示唆する限りにおいて (p.162)、この結果は興味深い。しかし著者らは、データ内のパターンについて他の説明も認めている。例えば、研究1では、行為者一観察者の組は互いに見知らぬ者同士であったため、観察者が行為者のユナイテッドフアンドタスクへのボランティア参加の可能性を評価する際に参考にした情報は、彼らが見た行動者の決定だけであった。観察者は、行為者自身よりこの1つの決定に影響されても不思議ではない。それは、行為者はおそらく自分自身のことをかなりよく知っており、評価をする上でより多くの情報を持っていたからだ。言い換えれば、研究Iの結果は、実験手順のアーティファクトかもしれない。

しかし、著者らは自分たちのデータを賢明に扱い、別の説明に反論することに力を注いでいる。この短い要約では、行動を説明する際の行為者一観察者の違いに関する仮説を支持するために著者らの努力を詳細に探ることはできないが、彼らが行った研究に対して過度な主張をしていないことは注目に値する：

これらの研究は、仮説が一般的に正しいことを示すものとは言えない。これらの研究は、単にそれ自体が興味深いデモンストレーションであり、非常に広範で多様な研究プログラムでなければ証明または反証できないほど広く適用可能な提案と一致しているものとみなすべきである。(p. 163)

謙虚さは、優れた研究の秘訣のひとつかもしれない。

●用語

性質 (personal disposition: PD)

個人と他者とを識別する再発性の行動的、情動的傾向。

暗黙の性格観 (implicit personality theories)

性格特性の相互関係に関する暗黙の想定のこと。日常生活における事象観察によって、ある性格特性が存在すると推論するときに使われる。

アーティファクト (artifact)

研究手順のある側面によって生じた人為的な発見であり、そのため実際の研究の問題に関

削除: 性質

削除: 起因させるものと

削除: 特徴

削除: 用

削除: 特徴用語

削除: 証明

連する情報を本当に教えてくれるわけではない。例えば、実験参加者が観察されていることを知っている場合、通常とは大きく異なる行動をとるかもしれない。この効果は「反応性 (反応傾向)」として知られており、アーティファクトの一つ形態である。

●文献

G.R.ファデンボス(監修) (2013). APA 心理学大辞典, 培風館.